

平成24年度 校内研究 計画 【決定】

平成24年5月29日（火）

大和第三小学校 研究推進委員会

I 研究の概要

1 研究主題

児童一人一人が自ら考え表現する力を育てる学習活動の在り方
～各教科等における言語活動の充実を通して～

2 主題設定の理由

(1) 小学校学習指導要領の理念

① 新しい学習指導要領の基本的な考え方

知識基盤社会¹の到来や、グローバル化の進展など急速に社会が変化する中、次代を担う子どもたちには、幅広い知識と柔軟な思考力に基づいて判断することや、他者と切磋琢磨しつつ異なる文化や歴史に立脚する人々との共存を図ることなど、変化に対応する能力や資質が一層求められている。一方、近年の国内外の学力調査の結果²などから、我が国の子どもたちは思考力・判断力・表現力に課題が見られる。

このような状況の中、教育基本法、学校教育法が改正され、知・徳・体のバランス（教育基本法第2条第1号³、学校教育法第30条第2項⁴）を重視し、学校教育においてはこれらを調和的に育むことが必要である旨が法律上規定された。ここには、学力の3要素として、①基礎的・基本的な知識・技能、②知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等、③主体的に学習に取り組む態度、が示された。

これらを踏まえ、平成20年1月に、文部科学省から『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）』（以下「平成20年答申」）⁵が提言された。そこでは、学習指導要領の改訂の基本的な考え方として、①改正教育基本法等を踏まえた学習指導要領の改訂、②「生きる力」という理念の共有、③基礎的・基本的な知識・技能の習得、④思考力・判断力・表現力の育成、⑤確かな学力を確立するために必要な授業時数の確保、⑥学習意欲の向上や学習習慣の確立、⑦豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実、の7点を挙げている。そして、学習指導要領の改訂に当たって充実すべき重要事項の第1として言語活動の充実を挙げ、各教科を貫く重要な改善の視点⁶として示された。

このような経緯を経て、平成20年3月に「小学校学習指導要領」が公示された。『小学校学習指導要領総則』⁷には言語活動の充実について、以下のように記載されている。

（前略）学校の教育活動を進めるに当たっては、各学校において、児童に生きる力をはぐくむことを目指し、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、基礎的・基本的な知識及び技能を習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。その際、児童の発達段階を考慮して、児童の言語活動を充実するとともに、家庭との連携を図りながら、児童の学習習慣が確立するように配慮しなければならない。

そして、「指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」⁸については、以下のように示されている。

各教科の指導に当たっては、児童の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知

識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、児童の言語活動を充実すること。

以上を踏まえると、各教科において思考力、判断力、表現力等を育成する観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語環境^{9・10}を整え、言語活動の充実を図ることに配慮することが求められていると言える。

② 各教科における言語活動の充実の意義

平成20年答申では、「各教科における言語活動の充実とは、今回の学習指導要領の改訂において各教科等を貫く重要な改善の視点である。（中略）国語をはじめとする言語は、知的活動（論理や思考）だけでなく、（中略）コミュニケーションや感性・情緒の基盤である。」と述べているように、学習指導要領では、言語に関する能力の育成を重視し、各教科等において言語活動を重視することとしている¹¹。

国語科においては「これらの言語の果たす役割に応じ、的確に理解し、論理的に思考し表現する能力、互いの立場や考えを尊重して伝え合う能力を育成することや我が国の言語文化に触れて感性や情緒をはぐくむことが重要」であり、各教科等においては「国語科で培った能力を基本に、それぞれの教科等の目標を実現する手立てとして、知的活動（論理や思考）やコミュニケーション、感性・情緒の基盤といった言語の役割を踏まえて、言語活動を充実させる必要がある¹²。

そして、各教科等における言語活動を充実させるためには、「各教科等の目標と指導事項との関連及び児童生徒の発達の段階や言語能力を計画的に位置づける」「授業の構成や指導の在り方自体を工夫改善していくこと」「教科間の関連や学年を超えた系統的で意図的、計画的な言語活動が実施されるよう、カリキュラムマネジメントを適正に行うこと」「児童生徒が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を計画的に取り入れるように工夫すること」「語彙や表現を豊かにするために適切な教材を取り上げること」「教育活動全体を通じた読書活動を推進すること」「学校図書館を計画的に利活用すること」「学校における言語活動を整備すること」に留意することが重要であると文部科学省は提唱している¹³。

③ 思考力・判断力・表現力等の育成と言語活動の充実

平成20年度答申において、思考力・判断力・表現力等をはぐくむためには、以下に述べる言語活動が重要であり、このような活動を各教科において行うことが不可欠であるとしている。

- ① 体験から感じ取ったことを表現する
(例)・日常生活や体験的な学習活動の中で感じ取ったことを言葉や歌、絵、身体などを用いて表現する
- ② 事実を正確に理解し伝達する
(例)・身近な動植物の観察や地域の公共施設等の見学の結果を記述・報告する
- ③ 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする
(例)・需要、供給などの概念で価格の変動をとらえて生産活動や消費活動に生かす
・衣食住や健康・安全に関する知識を活用して自分の生活を管理する
- ④ 情報を分析・評価し、論述する
(例)・学習や生活上の課題について、事柄を比較する、分類する、関連付けるなど考えるための技法を活用し、課題を整理する
・文章や資料を読んだ上で、自分の知識や経験に照らし合わせて、自分なりの考えをまとめて、A4・1枚（1000字程度）といった所与の条件の中で表現する
・自然事象や社会的事象に関する様々な情報や意見をグラフや図表などから読み取ったり、これらを用いて分かりやすく表現したりする
・自国や他国の歴史・文化・社会などについて調べ、分析したことを論述する
- ⑤ 課題について、構想を立て実践し、評価・改善する
(例)・理科の調査研究において、仮説を立てて、観察・実験を行い、その結果を整理し、考察し、まとめ、表現したり改善したりする
・芸術表現やものづくり等において、構想を練り、創作活動を行い、その結果を評価し、工夫・改

善する

⑥ 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる

- (例)・予想や仮説の検証方法を考察する場面で、予想や仮説と検証方法を討論しながら考えを深め合う
・将来の予測に関する問題など

そして、平成20年答申では、「これらの学習活動の基盤となるのは、数式なども含む広い意味での言語であり、その中心となるのは国語である。しかしだからといってすべてが国語科の役割というものではない」と述べられているように、言語活動は「すべての教科で行われるべきもの」であり、これらの活動を通して、「子どもたちの言語に関する能力は高められ、思考力・判断力・表現力の育成が効果的に図られる」と述べられている¹⁴。

この答申を受け、『学習指導要領総則』においても、確かな学力をはぐくむ観点からは、各教科を貫く重点事項の第1として言語活動を取り上げている。『小学校学習指導要領解説総則編』では、「各教科において基礎的・基本的な知識・技能の習得を重視するとともに、観察・実験やレポートの作成、論述などの知識・技能の活用を図る学習活動を充実すること、さらには総合的な学習の時間を中心として行われる、教科等の枠を超えた横断的・総合的な課題について各教科等で習得した知識・技能を相互に関連付けながら解決するといった探究活動の質的な充実を図ることなどにより思考力・判断力・表現力等を育成する」こととしている。そして、その基盤となるのは「言語に関する能力」であり、「国語科のみならず、各教科等においてその育成を重視」すべきである述べられている¹⁵。

以上のことから、思考力・判断力・表現力等を育成するには、言語活動の充実が何より重視されるべきであると言えよう。

(2) 本校の学校教育目標

本校は「楽しい学校・きれいな学校」を合い言葉に、「豊かな心と考える力をもち、たくましくはげむ児童育成～認め合い、高め合い、響き合い～」を学校教育目標とし、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和のとれた児童の育成を目指している。

学校経営の重点目標の1つとして、「主体的な学びを引き出す指導を通して、基礎基本を習得し、思考力・判断力・表現力を育成する」を掲げ、基礎的・基本的な知識・技能の習得と、思考力・判断力・表現力の調和のとれた指導を目指している。児童一人一人が自ら考えながら課題に取り組めるような主体的な学びを引き出す指導を通して、こららの力を育成することを目指している。

(3) 本校児童の実態及び昨年度の研究の課題

本校は、児童数二十数名という小規模小学校である。素直で指示されたことには責任をもって取り組む児童は多いが、自ら考えて判断して行動することや、自分の考えを適切に表現して相手に伝えることが苦手な児童が見られるという課題が、我々教師たちの中にはあった。そこで「児童一人一人が自ら考え表現する力を育てる学習活動の在り方」について校内研究に取り組むこととした。平成23年度当初に、全職員で「言語活動」に関する本校児童の実態を把握し、研究の具体的な方向性となるサブテーマを決定するために、概念化シートによるSWOT分析¹⁶を実施した。そこで浮かび上がった本校児童の言語に関する課題は、適切に聞き、理由を付けた根拠をもった発言ができないことであり、そのような態度となるような意欲付けが必要ではないかということが見えてきた。そこで研究のサブテーマとして、まずは言語活動の要である国語科に焦点を当てた取り組みを実践する意図から、「国語科における「聞く・伝える」意欲を高める手立ての工夫」を付け加え、授業研究を中心的な取り組みとして、研究実践してきた。

平成23年度の研究の成果と課題について、学力診断テストの「話すこと・聞くこと」に関する結果比較、アンケートによる意識の変容、教師による児童個々に対する絶対評価の比較の3点か

ら、年度末に振り返りを行った。そこで明らかになった成果と課題は、「話すこと・聞くこと」に関する学力診断テストの結果では、5学年以外は向上しており、成果が見られた。」「アンケート結果では、肯定的に自分自身の態度や能力を捉える児童が増えた。意識面でもよい変化が見られ出してきた。」「教師から見た評価や所見では、「聞くこと」に関する評価が上昇した児童が増えた。」であった。総括すると、「聞くこと」に関しては一定の成果が見られたが、「話すこと」に関しては向上の兆しは見えてきたが、依然として苦手としている児童が多く、表現力が足りないという分析結果となった。

(4) 研究主題の設定

上記(1)～(3)を踏まえ、今年度の研究主題を「児童一人一人が自ら考え表現する力を育てる学習活動の在り方～各教科等における言語活動の充実を通して～」とする。

自分の思いや考えを表現するためには、課題を思考し、適切に判断してこそできることであり、このような思考力・判断力・表現力を育むには、基礎的・基本的な知識・技能も不可欠である。このことは、平成20年答申を受け策定された学習指導要領の理念に沿ったものであり、そのような力を身につけるためには、言語活動の充実によってこそ身に付くものである。

大越らは「すべての教科等で言語活動を充実させるという視点は大事であるが、国語科が中心ということも忘れてはならない視点である」¹⁷と述べているように、国語科が言語活動の要であることには異論はない。本校職員の中には、要である国語科において言語活動の在り方をより具体的に研究して表現力を高めるべきであるという意見がある一方、国語科だけでなく各教科等において総合的に言語活動を充実させることによって表現力を高めるべきであるという意見がある。どちらの考え方も間違いではない。

しかし、本校は複式学級がある小規模小学校であり、管理職も含めた教職員全員が、すべての児童と各教科の指導や様々な教育活動場面で触れあっていることを踏まえると、国語科担当の教師のみならず、各教科等において全職員で言語活動を充実させることによって、研究主題に迫ることができると考えられる。よって、今年度はサブテーマとして「各教科等における言語活動の充実を通して」として、全職員が言語活動の充実を目指して取り組んでいくこととした。

3 本研究における目指す児童像

(1) 「目指す児童像」設定の経緯

平成23年度の校内研究を進めるにあたり、「目指す児童像」を設定した。吉田は、問題にうまく対処するためには「それに関わるものすべてが、問題を共通に認識したうえで、頭を1つにして改善（解決）策を考える必要がある」と述べ、問題解決のための6つのステップを提案している¹⁸。その中でも特に大事なものが「問題（ないし目標）の設定」であるとし、その際のポイントとして「明確かつ簡潔なもの」「具体的かつ解決（達成）可能なもの」「評価できること」の3つを提案している。

そこで、本研究においても、「話すこと・聞くこと」に関する目指す児童像（最終ゴール）を、国語科における「話すこと・聞くこと」における目標を土台にして、本校児童の実態と照らし合わせながら、各学年ごとに設定した¹⁹。

昨年度の成果として、「聞くこと」に関しては成果が見られたこともあり、今年度は、昨年度設定した目指す児童の姿の「話すこと」つまり「表現力」の部分を継続し、焦点化することにした。

(2) 各学年の目指す児童像

① 第1学年

身近なことや経験したことから、話題を決め、必要なことを話すことができる児童

② 第2学年

事柄を順序立てて、相手に応じて丁寧な言葉と普通の言葉との違いに気を付けて話すことができる児童

③ 第3学年

筋道を立て、相手を見ながら言葉の間をとり、丁寧な言葉を用いて話すことができる児童

④ 第4学年

言葉の抑揚や強弱に注意しながら、適切な言葉づかいで話すことができる児童

⑤ 第5学年

相手の意見を比較して、自分の考えをまとめて、的確に相手に伝えることができる児童

⑥ 第6学年（小学校卒業時の最終ゴール）

友だちの意見を聴き、自分の考えと比較し、自分の考えをまとめ、明確に伝えることができる児童

4 研究のねらい

各教科等における言語活動の充実を通して、児童一人一人が自ら考え表現する力を育てる学習活動の在り方を研究する。

5 研究の仮説

(1) 研究の仮説

各教科等における言語活動の充実を図れば、児童一人一人が自ら考え表現する力を育つであろう。

(2) 言語活動の充実の視点

言語活動の充実を図るためには、言語の役割を踏まえた指導を行うことが大切である。「言語は知的活動（論理や思考）の基盤であるとともに、コミュニケーションや感性・情緒の基盤である」^{20・21}とされており、「各教科等で言語活動を充実する際には、このような言語の果たす役割を踏まえた指導を行うことが大切」²²であると考えられる。白井が「活動あって学習なし」²³と言うように、言語活動が単に活動することに終始することのないように、「各教科等のねらいを言語活動を通じて実現するために意図的、計画的に指導することが重要」²⁴であると考ええる。

6 研究の方法

(1) 研究の方法に関する基本的な考え方

本研究においては、文部科学省が提案する「言語の役割を踏まえた言語活動の指導の在り方と留意点」に沿った言語活動をもとに授業研究を行っていく。その際、各教科等の単元の目標を達成するために、そこに示されている「言語の役割を踏まえた分類」（下記参照）²⁵の中のどの留意点を用いて言語活動を展開するのかを明確し、「各教科等の特質を踏まえつつ国語科との関連を図りながら、言語活動の考え方や諸点に留意し」²⁶ながら、授業研究を行っていく。そして、具体的にどのような言語活動を取り入れれば、各教科等の単元における目標の達成が図れ、児童一人一人が自ら考え表現する力を育つのかを研究する。その際、各学年の発達段階に配慮し、各学年の目指す児童像を踏まえた言語活動を展開するように留意する²⁷。さらに、少人数指導における効果的な言語活動の在り方にも留意しながら研究を進めていくようにする。

【言語の役割を踏まえた分類】

(1) 知的活動（論理や思考）に関すること

ア 事実等を正確に理解し、他者に的確に分かりやすく伝えること

(i) 事実等を正確に理解すること

(ii) 他者に分かりやすく伝えること

イ 事実等を解釈し説明するとともに、互いの考えを伝え合うことで、自分の考えや集団の考えを発展させること

(i) 事実等を解釈し、説明することにより自分の考えを深めること

(ii) 考えを伝え合うことで、自分の考えや集団の考えを発展させること

(2) コミュニケーションや感性・情緒に関すること

ア 互いの存在についての理解を深め、尊重していくこと

イ 感じたことを言葉にしたり、それらの言葉を交流したりすること

(2) 授業研究の進め方

① ワークショップ型授業研究の導入

校内研修における授業研究の持つ問題点については、たくさんの研究事例がある。授業づくりが「型はめ」に陥る危険性があること、授業研究における閉鎖性・保守性や機会の限定、研修に日常性がないこと、個々の教師の問題意識と研究テーマの乖離等、様々な問題点が指摘されている。北神は、校内研修における授業研究の問題点には授業研究の本質的な問題（意味づけや位置づけ）と現実的な問題（運営の仕方）があると指摘する。そして運営をめぐる改善策として、近年取り組まれているものが「ワークショップ型」授業研究であると紹介している²⁸。浜田が「一人ひとりの教職員が自分自身の実感やアイデアを出し合いながら学校づくりに参加することが重要」²⁹であると述べている。そして、そのようなコミュニケーションを活性化する働きがワークショップ型研修であり、「ワークショップ型研修は、教職員どうしのコミュニケーションのきっかけをつくり、教育実践やカリキュラムの革新をもたらす創発を促進するもの」であると述べている³⁰。

本校では、昨年度、様々な形態のワークショップ³¹を取り入れて研修を進めてきたが、研究主任のファシリテーション能力がまだ未熟であり、十分な成果を上げられなかったという反省点があった。しかし、研究主任の自己研修によるファシリテーション能力の向上を図りながら、今年度もこのワークショップ型授業研究（本校では「ワークショップ型授業研究」と呼ぶこととする）を継続して実践していき、教職員の持つ様々なアイデアを結集して、研究主題に迫っていきたいと考える。

② ワークショップ型授業研究の流れ

授業研究の進め方には、各学校において多種多様な形態があり、どの方法が最もふさわしいという正解はない³²。それぞれの学校に合った方法を試行錯誤しながら創り上げていくものであるといえる。今年度当初、研究主任から高志小スタイルの簡略版（各学年の授業研究を年度前半に実施し、その後全職員でレポートを作成して各自の実践を共有化して、後半はその共有化した実践事例を参考に各自で取り組むスタイル）を提案したが賛同が得られなかった。閉校を迎えるにあたり、多忙が予想され、研修時間の確保の困難さが予想されたために提案した方法であったが、教師たちからは、「やるからには理論を研究主任が提案して、もっときちんと研修すべきである」「少人数指導においてどのように取り組めばいいのか不安がある」「高志小スタイルがイメージできない」等の意見が出された。

昨年度の授業研究の流れは、①指導略案の検討（共同立案にするかどうかは授業者が決定する）、②授業公開（付せん紙に「良い点」「改善点」を記入しながら参観）、③ワークショップによる授業の振り返り（記入した付せん紙をもとにKJ法的手法で授業の「良い点」「改善点」を共有する）、⑤「校内研究だより」で報告、という流れで実施してきた。

よって、今年度は昨年度の授業研究の流れを継続しつつ、より組織的・協働的な取り組みを通して実施することにしたい。そして、最後に各教師個人で1年間の言語活動に関する取り組みを

A 4 版 1 枚程度のレポート作成を通して振り返り，そのレポートに関するワークショップを通して実践活動を交流し，目指す児童の姿に近づくための示唆を得るようにしたい。授業公開は，年間 1 人 1 回とし，下記に示すような流れで，今年度の授業研究を実施していきたい。

＜平成24年度 校内研究に関する校内研修 授業研究の流れ＞

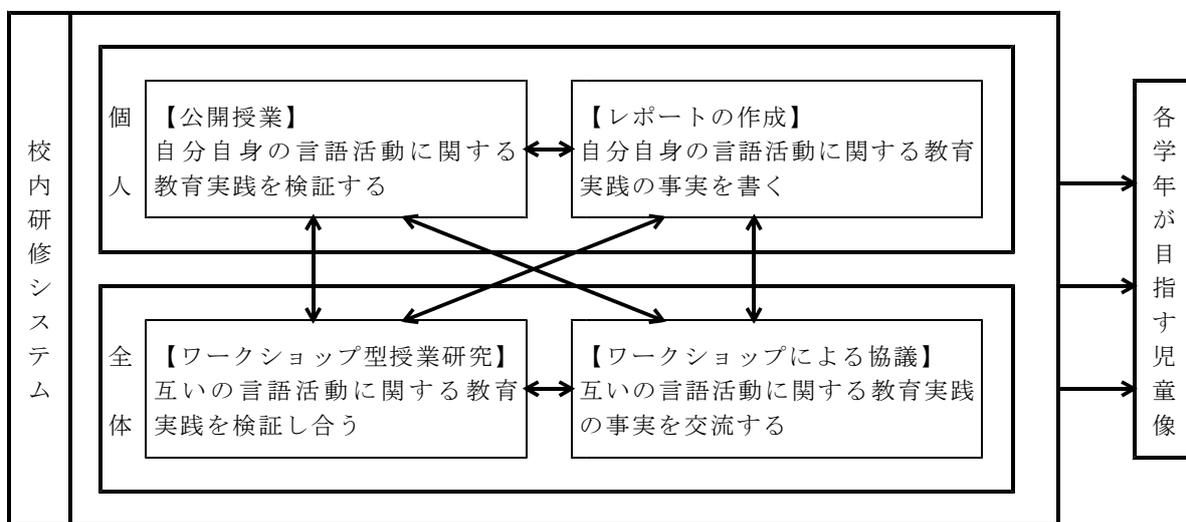
1 各授業研究の流れ

- ① 事前指導案検討会（授業研究部，授業者，学年ブロック担任）【授業公開 1 週間前】
- ② 指導案の事前配付（授業者）【授業公開数日前】
- ③ 授業公開（全職員参観。付せん紙に「良い点」「改善点」を記入）【授業公開当日】
- ④ ワークショップ（全職員参加）【授業公開当日を基本】
- ⑤ 校内研究だよりの発行（研究主任）【ワークショップの翌日】

2 校内研究の振り返り

- ① 言語活動に関する取り組みの振り返り（個人）【全教師の公開授業終了後】
- ② 各自のレポートを用いたワークショップ（全員）【事前に配付されたレポートをもとに振り返り】

また，このワークショップ型授業研究を図化すると以下のように整理することができる³³。



③ 授業公開の教科

研究主題は「児童一人一人が自ら考え表現する力を育てる学習活動の在り方～各教科等における言語活動の充実を通して～」である。教科に隔たりなく授業を公開し合い，互いに学び合い，目指す児童像の育成に役立てていきたい。しかし，複数の教科を受け持つ教師にとっては，問題意識の中心となる教科で言語活動の取り組みの在り方について授業研究を契機として探究して学んでいくことで，その後の授業づくりにおける効果が期待できる。また，こうすることによって，研究テーマと教師個々が持つ問題意識の垣根が少しでも小さくなると考えられる。

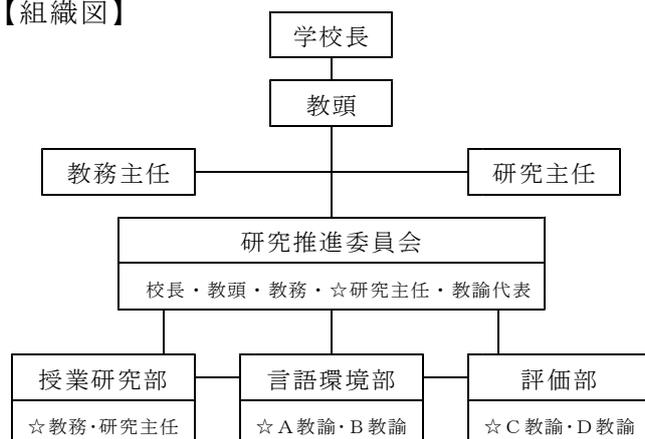
よって，公開する教科については，授業公開者同士の協議を経て，なるべく教科が隔たらないように調整しながら決定していくこととする。

(3) 研究組織の構築

今年度は，研究組織を明確にして，全教職員で校内研究を進めていきたいと考える。昨年度は，研究テーマの設定，目指す児童像の設定，掲示物の作成，評価方法の決定等，全教職員によるワークショップを基本とした話し合いで進めてきたが，時間的な制約，研究主任が描くビジョンの不明瞭さ等から，全教職員で協議しながら進めてきたにも関わらず，共通理解されながら取り組みがなされたとはいいがたい。そこで，今年度は，研究組織を編成し，役割を明確にしながら，全職員で研究を進めていきたいと考える。今年度の研究組織を以下のように提案する。

<平成24年度 校内研究に関する校内研修 研究組織>

【組織図】



【活動内容】

名 称	主な活動内容
学校長	最終決定・指導・助言
教 頭	学校長の補佐・指導・助言
教務主任	研修計画の補佐・指導・助言
研究主任	研究計画・協議会の進行・その他
授業研究部	指導案形式の提案・指導案検討会
言語環境部	言語環境整備の提案・作成
評価部	評価方法の提案、評価集計

☆各部主任

7 研究日程

研究の日程を下表のように提案する。ただし、研究の進行状況及び閉校作業に合わせて、臨機応変に変更するものとする。

時期	研究実践内容	主な学校行事
4月中旬	今年度の研究テーマと研究方法の協議（第1回）	
5月下旬	今年度の研究テーマと研究方法の協議（第2回）	学校管理訪問(17日)
6月中旬	授業研究部から指導案形式の提案 研究授業（5・6年生）※計画訪問を兼ねる	梅の実体験学習(5日・6日) 個別面談(14・15日) プール開始(18日) 計画訪問(26日)
夏休み	研究授業計画（時期・公開教科の決定） 言語環境部・評価部から提案・協議・作成	
9月上旬	評価の実施（第1回）	秋季大運動会(22日)
10月中旬	研究授業（〇年生）	さつまいも収穫(16日) 生徒指導訪問(22日) 学校管理訪問(24日) 宿泊学習（25・26日）
11月下旬	研究授業（〇年生）	部会音楽会(7日) 大和ふれあいフェスティバル(11日) 個別面談(20・21日)
12月初旬	研究授業（〇年生） 評価の実施（第2回）	
1月下旬	レポートによる振り返り 校内研究のまとめ	書き初め大会(9日) 学力診断のためのテスト(11日) 全校スケート教室(18日)

¹ 高木展郎 「「知識基盤社会」の時代における言語活動の意味」 高木展郎編 『各教科等における言語活動の充実—その方策と実践事例—』 教育開発研究所、2008年、12頁

高木は、知識基盤社会（knowledge-based-society）の特質の例として、①知識には国境がなく、グローバル

化が一層進む、②知識は日進月歩であり、競走と技術革新が絶え間なく生まれる、③知識の進展は旧来のパラダイムの転換を伴うことが多く、幅広い知識と柔軟な思考力に基づく判断が一層重要になる、④性別や年齢を問わず参画することが促進される、などを挙げている。

2 文部科学省 『言語活動の充実に関する指導事例集～思考力、判断力、表現力等の育成に向けて～【小学校版】』 文部科学省、2011年11月、4-5頁

経済協力開発機構（OECD）のPISA調査の結果からは、読解力の低い層の割合が多いこと、必要な情報を見付け出し取り出すことは得意だが、情報相互の関係性を理解して解釈したり、自らの知識や経験と結びつけたりすることが苦手であることが指摘された。また、全国学力・学習状況調査の結果から、思考力・判断力・表現力等といった「活用」に関する記述式問題に課題が見られ、知識に関する問題にも課題が見られたことから、知識を活用する力を育成することと合わせ、基礎的・基本的な知識・技能も定着させることが重要である。

3 教育基本法 第2条（教育の目標）

1 幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うとともに、健やかな身体を養うこと。

これは「生きる力」を育むことを法制化したものと言える。「生きる力」をはぐくむには、「確かな学力」、「豊かな心」、「健やかな体」の育成を調和的に行うことが重要である。

4 学校教育法 第30条（小学校教育の目標）

2 前項の場合においては、生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。

5 文部科学省 『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）』 平成20年1月、http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_ic_sFiles/afieldfile/2009/05/12/1216828_1.pdf（2012/05/13最終アクセス）（以下、「平成20年答申」とする。）

改訂の基本的な考え方については、21-29頁を参照されたい。

6 同上書、52-54頁

7 文部科学省 『小学校学習指導要領』 平成20年3月、13頁

8 同上書、16頁

9 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 総則編』 2008年8月、55頁

児童の言語活動は、児童を取り巻く言語環境によって影響を受けることが大きく、学校生活全体における言語環境を整備することが大切であり、学校全体における言語環境を望ましい状態に整えておくことが児童の言語活動を適正にする上で重要であるとしている。学校生活全体における言語環境の整備として、次の6点を例示し、留意すべきであると述べている。

- ① 教師は正しい言語で話し、黒板などに正確で丁寧な文字を書くこと
- ② 校内の掲示板やポスター、児童に配付する印刷物において用語や文字を適正に使用すること
- ③ 校内放送において、適切な言葉を使って簡潔に分かりやすく話すこと
- ④ 適切な話し言葉や文字が用いられている教材を使用すること
- ⑤ 教師と児童、児童相互の話し言葉が適切に行われるような状況をつくること
- ⑥ 児童が集団の中で安心して話ができるような教師と児童、児童相互の人間関係を築くこと

10 佐藤喜美子 「言語活動の充実を図るための言語環境の整備」 高木展郎編 『各教科等における言語活動の充実—その方策と実践事例—』 教育開発研究所、2008年、39-41頁

佐藤は、言語環境整備・実践構想として、計画1～5を具体的案として提案している。詳しくは文献を参照されたい。

11 『平成20年答申』、53頁

12 『平成20年答申』、53-54頁

国語における具体例として、次の2点を述べている。

- ・特に小学校の低・中学年において、漢字の読み書き、音読や暗唱、対話、発表などにより基本的な国語の力を定着させる。
- ・古典の暗唱などにより言葉の美しさやリズムを体感させるとともに、発達の段階に応じて、記録、要約、説明、論述といった言語活動を行う能力を培う必要がある。

各教科等の具体例として、知的活動の基盤という言語の役割の観点からは、

- ・観察・実験や社会見学のレポートにおいて、視点を明確にして、観察したり見学したりした事象の差異点や共通点をとらえて記録・報告する（理科、社会等）

- ・比較や分類、関連付けといった考えるための技法、帰納的な考え方や演繹的な考え方などを活用して説明する（算数・数学、理科等）
 - ・仮説を立てて観察・実験を行い、その結果を評価し、まとめて表現する（理科等）
- コミュニケーションや感性・情緒の基盤という言語の役割の観点からは、
- ・体験から感じ取ったことを言葉や歌、絵、身体などを使って表現する（音楽、図画工作、美術、体育等）
 - ・体験活動を振り返り、そこから学んだことを記述する（生活、特別活動等）
 - ・合唱や合奏、球技やダンスなどの集団的活動や身体表現などを通じて他者と伝え合ったり、共感したりする（音楽、体育等）
 - ・体験したことや調べたことをまとめ、発表し合う（家庭、技術・家庭、特別活動、総合的な学習の時間等）
 - ・討論・討議などにより意見の異なる人を説得したり、協同的に議論して集団としての意見をまとめたりする（道徳、特別活動等）

を挙げ、これらの活動を重視すべきであると述べている。

13 文部科学省 『言語活動の充実に関する指導事例集～思考力、判断力、表現力等の育成に向けて～【小学校版】』 2011年11月、3-4頁

14 『平成20年答申』、25-26頁

15 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 総則編』 2008年8月、3頁

16 村上雅弘編 『「ワークショップ型研修」で学校が変わる 学校を変える』 教育開発研究所、2010年、86-87頁、176-179頁

学校現場でよく行われるのは、「概念化シート」である。縦軸に「強み・弱み」、横軸に「教師・生徒」を配置し、4象限のマトリクスを作成し、ブレインストーミング法によって出された意見を各象限に配置しながら。KJ法でグループ化していき、児童・教師それぞれに対する強み・弱みを把握するワークショップである。これは、企業等で行われているSWOT分析の学校現場バージョンと言えよう。企業等で行われているSWOT分析（SWOT analysis）とは、目標を達成するために意思決定を必要としている組織や個人の、プロジェクトやベンチャービジネスなどにおける、強み（Strengths）、弱み（Weaknesses）、機会（Opportunities）、脅威（Threats）を評価するのに用いられる戦略計画ツールの1つである。組織や個人の内外の市場環境を監視、分析している。1960年代から70年代にスタンフォード大学で研究プロジェクトを導いた、アルバート・ハンフリーにより構築されたものである。

17 大越和孝・成家亘宏・藤田慶三編著 『「話すこと・聞くこと」の言語活動の展開』 東洋館出版、2010年、8頁

18 吉田新一郎 『会議の技法』 中央公論新社、2000年、120-123頁

吉田が提案する問題解決（ないし目標達成）の6つのステップは、以下の通りである。

- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| 1 問題を設定する（目標を設定する） | 2 問題を分析する（可能性を分析する） |
| 3 解決策を考え出す（実現方法を考え出す） | 4 解決策を選び出す（実現方法を選び出す） |
| 5 計画する・実行する | 6 評価する |

平成23年度の校内研究に関する校内研修は、基本的にこの6つのステップに沿って実践してきた。

19 「平成23年度 大和第三小学校 校内研究に関する校内研修 ふりかえり」 2012年2月、
<http://www.sopia.or.jp/yama3e1/>（2012/05/19最終アクセス）

20 言語力育成協力者会議 『言語力の育成方策について（報告書案）【修正案・反映版】』 平成19年8月、http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/036/shiryo/07081717/004.htm（2012/05/19最終アクセス）

中央教育審議会は、この報告書を踏まえ、平成20年度答申を取りまとめている。

21 高木展郎編 『各教科等における言語活動の充実—その方策と実践事例—』 教育開発研究所、2008年、27-35頁

「知的活動（論理や思考）に関すること」ことについては、牧戸章「言語活動の基盤としての知的活動（論理や思考）」（同上書、27-29頁）を参照されたい。

「コミュニケーションや感性・情緒に関すること」については、松友一雄「言語活動の基盤としてのコミュニケーション能力の育成」（同上書、30-32頁）及び笠井正信「言語活動の基盤としての感性・情緒」（同上書、33-35頁）を参照されたい。

22 文部科学省 『言語活動の充実に関する指導事例集～思考力、判断力、表現力等の育成に向けて～【小学校版】』 2011年11月、7頁

23 白井達夫 「国語科における言語活動の充実（小学校）」 高木展郎編 『各教科等における言語活動の充実—その方策と実践事例—』 教育開発研究所、2008年、46頁

24 文部科学省 『言語活動の充実に関する指導事例集～思考力、判断力、表現力等の育成に向けて～【小学校版】』 2011年11月、7頁

25 同上書、7-9頁

26 同上書、11-17頁

ここには、各教科等の特質を踏まえた言語活動の考え方や諸点が述べられている。各教科等において、言語

活動を実施するにはよく内容を読み、理解する必要がある。

27 同上書，10頁

「児童が言語を基に対象に関する概念を構築していくためには、体験したことを整理して、それを言葉で表すなどの言語活動が必要」になり、「小学校低学年から中学年までには、体験的な理解や具体物を活用した思考や理解、反復学習などの繰り返し学習等の工夫による「読み・書き・計算」の能力の育成を重視」し、「中学年から高学年にかけて以降は、体験と理論の往復による概念や方法の獲得、討論・観察・実験による試行や理解を重視」するような指導上の工夫が必要であると述べられている。低学年、中学年、高学年における指導上の具体的な工夫点の参考事例が明記されている。

28 北神正行 「校内研修の現状と課題」 北神正行・木原俊行・佐野享子編著 『学校改善と校内研修の設計』 学文社，2010年，39頁

29 浜田博文 『「学校の組織力向上」実践レポート』 教育開発研究所，2009年，35頁

30 同上書，137頁

31 中野民雄 『ワークショップー新しい学びと創造の場ー』 岩波新書，2001年，11頁

中野は、ワークショップを「講義など一方的な知識伝達のスタイルではなく、参加者が自ら参加・体験して共同で何かを学び合ったり創り出したりする学びと創造のスタイル」と定義している。

32 研修スタイルについては、数多くの方法論や実践事例が論文、文献で発表されている。有名なものとしては、「学びの共同体」「高志小スタイル」等がある。「学びの共同体」は、「一斉指導」から「協同的な学び」への変革を目指した取り組みである。指定研究で「格好をつける研修」ではなく、教師・学校の実実に即した研修を日常化する研修スタイルである。授業研究を頻繁に行い、教師・児童とともに学び合っていく研修スタイルである。「高志小スタイル」は、毎月報告されるA4版1枚程度レポートを通したワークショップを通して、各教師が実践したものの良いところを広げていく方法である。各自の「相違」ある実践の中から、ワークショップを通して「創意」ある取り組みが共有され、各自が実践していくことによって学校として「総意」ある取り組みを創り出していく方法である。下記文献・論文を参照されたい。

・佐藤学 『学校の挑戦ー学びの共同体を創る』 小学館，2006年

・岩瀬直樹 『教師も学び合う「協働文化」を生み出す学校スタイル～上越市高志小学校を事例として』 「平成14年度長期研修派遣教員報告書」 <http://www1.s-cat.ne.jp/iwase/upfile/kyoudoubunka.pdf> (2012/05/20最終アクセス)

33 浜田博文 『学校を変える新しい力 教師のエンパワーメントとスクールリーダーシップ』 小学館，2012年，133頁

この図は、この文献に紹介されている「教師の自律と協働を再構築した中津小学校」の校内研究のシステムを図解したものを参考に作成したものである。

II 研究の実際